『何如璋集』に登場する跡見花蹊のこと

跡見学園女子大学 文学部 人文学科 教授
横田 恭三

はじめに

今回「にいくら」の執筆にあたり、花蹊に関する資料を集めてあれこれ検討していたところ、花蹊の書画に記された落款（署名と印章）からその書写年代を導き出せるかもしれないと思い至った。しかし、実際に作業してみると予想した方向性が得られず、執筆は頓挫した。そんな折り、4，5年前に購入した『何如璋集』が手元にあることに気づいた。というのも当時、花蹊は駐日公使として来日した何如璋と交流があったからである。花蹊は、明治11年（1878）、女弟子を引き連れて清国公使館の何如璋のもとを訪れ、最も年若い弟子（三條智恵子）に揮毫させたことが『彤管生輝帖』の挿絵に残されている（註1）。このことに関しては私を含めた三人の本学教員が『にいくら』№16（平成23年3月発行）に小論を発表したことがある（註2）。こうした理由も手伝って、何か研究材料がないものかと頁を繰っていたところ、最後尾の付録部分が目にとまった。もしやと感じ、さらに丹念に目配りしていくと、何と「花蹊」の文字があるではないか。関連する記述は全部で6行だけだが、内容は『彤管生輝帖』に描かれている揮毫の情景を裏付けるものであった。

そこで今回は『何如璋集』をもとに、花蹊と何如璋の交流およびその周辺についていささか考察を加えてみようと思う。

1．『何如璋集』とその付録の記述について

何如璋『何如璋集』は清朝の何如璋自身の著録であるが、その前言によれば、呉振清・呉裕賢が散逸していた何如璋の著作を捜輯して整理校訂し、2010年、天津人民出版社から上梓したものである。

章立ては、巻1「詩集」、巻2「文集」、巻3「奏疏公牘函稿」、巻4「在日本筆談資料」、付録「何如璋伝奇資料」「馬尾海戦事件文献資料摘録」となっている。直接、花蹊の記事がある箇所は付録「何如璋伝奇資料」であるが、その前章にあたる巻4には何如璋の日本における交友録と考えられる資料も含まれているので、先ずは巻4から眺めてみたい。

巻4には二種の筆談資料が掲載されている。一つは「清朝駐日本使館与朝鮮人筆談」、もう一つが「与日本人筆談」である。後者は298頁から大約80頁近い内容であるが、そこに登場する日本人名を列挙し、略歴を付してみよう。

① 大河内輝聲（1848～1882） 号は桂閣。高崎藩知事。廃藩置県後、東京に英学校を設立。漢学的教養による中国文化愛好者。
② 宮島誠一郎（1838～1911） 号は養浩堂。官僚・政治家。書家・中国語研究の宮島大八（詠士）はその息子。
③ 青山延寿（1820～1906） 号は鉄槍。東京府庁地誌課、新政府の修史局などに勤務。
④ 亀谷行（1838～1913） 号は省軒。維新後、岩倉具視の知遇を得て新政府の諸制度の制定に参画。
⑤ 岡千仞（1833～1914） 号は鹿門。幕末・明治の漢学者。維新後、修史館協修・東京図書館長などを歴任。
⑥ 加藤熙（1811～1884） 号は友鄰。明治22年発行「書画名家一覧」に氏名あり。
⑦ 内村宜之（1833～1907） 号は綏所。漢学者。大河内輝声の部属。内村鑑三（1861～1930）の父。
⑧ 重野安繹（1827～1910） 号は成斎。漢学者、歴史家。日本初の文学博士の一人。
⑨ 古賀謹堂（1816～1884） 通称は謹一郎。儒学者・官僚。
⑩ 中川英助（・・・・・） 号は雪堂。「明治15年絵画共進会出品画家一覧」に氏名あり。
⑪ 副島種臣（1828～1905） 号は蒼海。明治の政治家・書家。内務大臣を務める。
⑫ 榎本武揚（1836～1908） 号は梁川。明治の外交官・政治家。文部大臣、外務大臣などを歴任。
⑬ 吉井友実（1828～1891） 号は三峰。官僚。大日本帝国憲法の審議に参加。

以上13名にのぼる。

「与日本人筆談」の巻頭では、1878（明治11）年3月23日以降の大河内輝聲との筆談を掲載している。彼は中国文化愛好者であり、彼自身も何如璋との交流の記録を『大河内文書』（註3）として残した。二人の筆談は同年4月3日、4月9日、4月16日、5月6日と順次続き、1880（明治13）年4月9日まで14回にわたっている。さらに1878（明治11）年6月14日には、宮島誠一郎らとの筆談が記されている。宮島は自由民権運動に先駆けていち早く憲法制定・議会開設の建白を行った人物である。以後、1882（明治15）年2月4日まで都合8回の記録が残されている。これ以外に「筆話残稿」と題して宮島誠一郎が何如璋、

張斯桂（註4）両公使と初めて面会した際の筆談の残稿がある。それらの内容は、政治・文学・芸術から酒色の話題に至るまで多岐にわたっている。大河内、宮島両名の筆談記録には日本人総勢13名が登場するが、ここに花蹊の名は見えない。それだけでなく、女性は一人も登場しない。明治の初め、日本においては女性が政治に参画することは考えられず、駐日公使と面会するなどという機会は通常はあり得ないことであったろう。したがって筆談記録がすべて男性であるという状況は当然のことと言わねばならない。

さて、花蹊は漢学の素養は十二分にあったことは知られているが、中国語に堪能であったという話は聞かない（註5）。したがって、何如璋と面会した事実から見て、その筆談記録が残されていても不思議ではないが、この「在日本筆談資料」中に記述がないのは、どのような理由からであろうか。

前述した付録「何如璋伝記資料」自体は377頁～400頁までの24頁であるが、花蹊に関する記事は6行にとどまる。この記事より前の段落には、日本の政府や民間と酒席での交歓会を開催したことが綴られており、その後に「又有花蹊跡見氏…」で始まる花蹊の記事が登場する。この「又」は「さらに、加えて」の意であるから、前段の交歓会の話題に関連の深い記事として追記したものといえよう。名だたる男性の中にあって唯一女性である花蹊の名が特別に加えられたともいえる。以上、二つの資料を合わせて日本語訳を行い、検討してみたい。

府君居東四年、与日本朝野上下、聯文字杯酒之歓。其秉国鈞者、如三条実実、岩倉具視、大久保利通等、皆彼国之俊雄豪傑、与府君交歓尤無間、公筵之余、柬約至私邸、率妻孥倒屣相迎、跪献茶果羹湯、（日俗席地屈膝坐、跪拝甚便。）其見敬礼如此。其在野之名士、如安井息軒、則以詩文集乞評点刊行。如石川鴻斎、岡千仞等、則唱和之篇章盈箧。（日本名士与府君以文字相交者甚多、不能備挙。）凡以詩文相投者、悉推誠相与、莫不翕然悦服。毎集会不假舌人、輒以紙筆通款曲、鎮日不聞一言、但聞歓笑拍掌之声浪間作而已。

〈大意〉

府君（何如璋のこと）は東方の日本へ来て四年、政府と民間のさまざまな人々と合同で文字や酒杯の交歓会を開催した。その国政に当たっている三条実美、岩倉具視、大久保利通らはみな、日本の俊雄豪傑であり、何如璋との交流が親密であった。酒宴のあと、招かれて私邸に至れば、彼らは妻子を率い慌ただしく客を迎える。妻子は跪いて茶菓とお吸い物を提供する（日本の家では跪いて拝謁する習慣があるがこれは甚だ重宝である）、その礼儀作法は驚くばかりである。在野の名士の一人、安井息軒は詩文集で評点刊行を請い来たり、石川鴻斎、岡千仞らとは唱和した篇章が数え切れないほど多く、手箱に満ちるほどであった（日本の名士と何如璋とが文字を通じて交流することが非常に多く、枚挙にいとまがない）。およそ詩文によってお互いの意思を通じる者はことごとく誠意を持って接するので、言行一致、みな喜んで服する。集会ではつねに通訳者を介さず、紙筆をもって歓談して打ち解ける。終日、会話する声は一言も発せられないが、ただ、ときおり歓声や拍手が聞こえるだけである。

この伝奇資料に拠れば、何如璋は交歓会において、三条実美（1837～1891）、岩倉具視（1825～1883）、大久保利通（1830～1878）ら日本史上の人物と通訳を介さず、すべて筆談で親交を深めていたことがわかる。また在野の名士、安井息軒（1799～1876）、石川鴻斎（1833～1918）、岡千仞（1833～1914）らの名も見え、相互に意思の疎通を図ったことが窺える。

2．何如璋と花蹊の交流を示す記事

前章の文に続いて、いよいよ花蹊に関する文章が綴られている。以下に記してみよう。

又有花蹊迹見氏、処女之至老不嫁者也、提倡女学、開迹見女校、所収女生倶華族淑媛、（華族、即日本之貴族。）毎過従府君讌談、携生徒二三十人来、対客揮毫。有三条相国之女公子、年七齢、書径尺字甚蒼勁。各女生咸献技就正、執女弟子礼甚恭。并絵《諸女生環見公使図》征題詠、編刊成集、海国流伝、侈無美談。寿朋于甲辰与花蹊相見、詢知家世、出当時所贈之扇折相観、顔色猶未変更、追談二十年事、娓娓無倦容。其見尊仰如此、是亦巾箱中一故実也。

〈大意〉

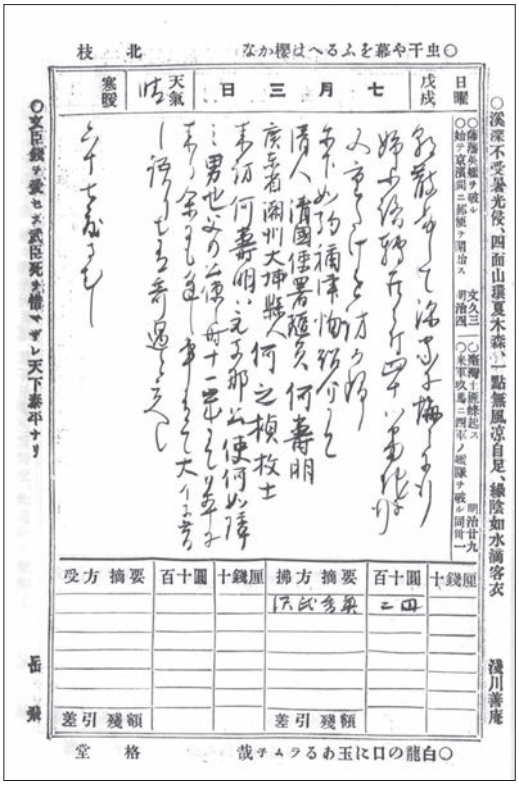
さらに未婚の女性で跡見花蹊氏がいる。女性の学問を提唱して跡見女学校を開校したが、そこに集う女子はみな華族の娘たちである。（花蹊は）つねに府君（何如璋）に付き従って宴席で歓談し、生徒20～30人を引き連れて客人の前で揮毫してみせる。三条実美大臣の娘、7歳は直径一尺の文字を書いたが、きわめて力強い。女子生徒はそれぞれ技能を献納して叱正を請い、女弟子の礼をうやうやしく執り行っている。

また『諸女生環見公使図』を描いてお題の詩を詠み、その詩集を刊行して、国内に流布している。美談たることこの上ない。

甲辰の年、息子の何寿朋は花蹊と面会し、かつての友人の消息を訪ねた。当時贈られた扇子を取り出して眺めてみると、その色はまったく変化しておらず、20年前のことを想い出しながら談笑してもつきなかった。（花蹊の）その尊仰たる姿はこのようである。これまた懐中の一故事である。

ここで登場するのが跡見花蹊である。つねに何如璋に付き従って宴席で歓談したとある。また教え子（生徒）を引き連れて、招かれた人々の前で揮毫させる。今で言う“書道パフォーマンス”といえよう。三条実美大臣の娘（智恵子、7歳）が直径一尺の文字で力強く書いたとある。これは『彤管生輝帖』内の挿絵にある大字「鳳鳴」2字を揮毫している場面と一致する。つまり、三條智恵子による揮毫パフォーマンスは、何如璋が主催する宴席での一コマであったということになろう。なお、『花蹊日記』明治十一年（1878）の項には「夏日　　予、六人女弟子を携て、清国公使館ニ招待せられて、何如璋其外、詩書画を席上に揮ひ、詩の贈答ありて、彤管生暉帖（彤管生輝帖）新刊成る。」とある。「夏日」とあるだけで、正確な期日は不明であるが、『彤管生輝帖』の挿絵の余白に記された款記には「戊寅清和月」とあることから、陰暦4月に訪問したものであろう。この日記の記述によって何如璋から公使館に招待されて揮毫パフォーマンスのほか、詩の贈答も行われ、『彤管生輝帖』として実を結んだことが分かるのである。

「女子生徒はみな技能を献納して叱正を請い、女弟子の礼をうやうやしく執り行う」という表現から、女生徒はみな花蹊の薫陶を受けた子弟たちばかりで、礼儀作法に関しては非の打ち所がない様子が窺われる。また何如璋は、花蹊が「詩集を刊行し、それが国内に流布」している事実を承知していたことが読み取れる。何如璋は駐日公使として滞在中、花蹊とこのようにして親交を深めていたのであった。



さらに20年後（甲辰の年＝明治37年［1904］）、何如璋の息子である何寿朋（『花蹊日記』活字訳では「寿明」と誤記（註6））は敬仰していた花蹊の邸宅を訪れて再会し、以前何如璋が花蹊に贈った扇子を鑑賞しながら当時を回想し談笑したことが記されている。これを裏付ける資料として、この年の『花蹊日記』七月三日に「午下如約、禰津恂紹介にて清人清国使署随員何寿朋、広東省潮州大埔県人何之楨枚士来訪。何寿朋ハ元支那公使何如璋之男也。父の公使之時、十一歳にて日本に来り。余にも逢し事有て大イに昔し語りも有。奇遇と云へし。」とある。この記述によれば、禰津恂の紹介で清国公使館随員である何寿朋と広東省出身の何之楨の二人が花蹊宅を訪れた。何寿朋は何如璋の息子で、父に伴って来日したときの年齢は11歳であったが、花蹊はその時からすでに何寿朋と接点があったことが分かる。

ちなみに明治37年といえば、日露戦争開戦の年にあたり、連日、戦争報道が伝えられる日々であった。

おわりに

何如璋の招待によって花蹊は宴席に同席するほどの極めて親しい間柄であったことは疑う余地がない。何如璋とのこうした良好な関係は、どのようにして築かれたのであろうか？明治3年（1870）、東京に移って以降、花蹊は姉小路家や万里小路家をはじめとする公家たちとの交流、あるいは昭憲皇太后との出会いがあり、御前揮毫をはじめとする書画の揮毫や指導の機会を得たことが知られる（註7）。ここで特筆すべきことがある。明治４３年3月8日の日記に、外務省から画帖の制作を依頼されたことを示す記述が残されていた。この画帖は清国向けのものであった。その画帖がなんと台北故宮博物院に収蔵されていることが判明し、本学の泉雅博教授、矢島新教授、池上貞子名誉教授らがこれを現地で確認している（『にいくら』№23〈平成30年

3月発行〉参照)。国共内戦の折に、蒋介石により第一級文物が台北へ運び出されたことは周知の事実だが、その中に花蹊の画帖も含まれていたということは、清国との文化交流の一端を花蹊の画帖が担ったという見方もできよう。

明治8年（1875）11月、跡見学校を開設して以降も、かずかずの書画揮毫の依頼が舞い込んできたことであろう。こうした中で何如璋との出会いがあった。大河内輝聲や宮島誠一郎らが毎回通訳を介せず筆談で時を過ごしたという事実から考えれば、花蹊も筆談したはずであるが、『何如璋集』には花蹊との筆談記録が残されていない。なぜ残されていないのか、官僚や政治家ではなかったからか、あるいは女性だからか、現段階ではその理由を明らかにすることはできない。

いずれにしても明治の初め、男性中心の社会にあって女学校を開設した花蹊は、次代を見据えた女子教育の先駆者であっただけでなく、詩文や書画を介して国際交流を実践した進歩的な女性であったといえよう。今後これらを補綴しうる新たな資料が発見されることを期待しながら、ひとまず擱筆することにする。

最後になったが、中文翻訳にあたり、本学の安本真弓准教授に多々ご教示いただいた。ここに記して謝意を表する。

註

註1：『彤管生輝帖（とうかんせいきじょう）』は、花蹊が清国公使館を訪問した際に作られた詩や文を1冊にまとめたもので、日本の巌谷一六（書記官）、日下部鳴鶴（大書記官）、清国の黄遵憲（外交官）らの文も記されている。明治13年（1880）2月24日出版。

註2：『にいくら』№16（平成23年3月、本学花蹊記念資料館・学芸員課程編集・発行）7頁〜12頁参照。3名の教員とは、掲載順に横田恭三（「跡見花蹊と何如璋」）・池上貞子（「［解説］黄遵憲と「日本雑事詩」」）・植田恭代（「『跡見花蹊日記』にみる清国公使館訪問」）である。

註3：『大河内文書』は、高崎藩の藩主であった大河内輝聲が駐在した清国高官と交わした筆談録である。とりわけ書記官の黄遵憲との記録が多く遺されている。

註4：張斯桂（1816年－1888年）は清国の外交官。ちなみに、本資料館には張斯桂が花蹊に贈った書が収蔵されている。

註5：花蹊は詩文・書法を頼山陽門下の宮原節庵に学んだ。

註6：『花蹊日記』七月三日に書かれた2か所の「寿朋」の文字を見ると、後者の文字は「明」に誤読しやすい行書で書かれている。

註7：公家との交流や昭憲皇太后との出会いについては、泉雅博・植田恭代・大塚博著『跡見花蹊　女子教育の先駆者』（ミネルヴァ書房、2018年）に詳しい。